

[ジョイント]

September 2010

No.4

【特集】 Vision 2010

よりよい未来へ向けて

21世紀の幕が開いて、ほぼ10年。めまぐるしく変動する世界は、そして私たちの未来はこれからどうなっていくのか。公益財団法人となり、トヨタ財団としても一つの節目を迎えた今、豊かな社会と人間の幸せのためのビジョンを求めて、今後の進むべき方向性を探る。



❖ **新法人としてのスタートにあたって**
トヨタ財団常務理事 加藤広樹



この度、トヨタ財団は公益財団法人への移行という一つの節目を迎え、新たなスタートを切ることとなりました。

現在、世界は、そして日本は時代の転換期にあり、政治、経済、文化など社会の根幹をなす部分でさまざまな問題・課題が山積し、複雑に関係し合いながら、その解決への道が模索されています。

そんな社会情勢のなかでの再出発にあたり、トヨタ財団は公益への寄与、社会への貢献を一段と強化すべく、新定款の策定など制度面の再検討と並行して「ビジョン懇話会」を開催、プログラム運営の指針となるビジョンの策定を進めてまいりました。その内容に関しては本号の特集をお読みいただければ幸いです。この場をかりて一言付け加えさせていただきます。

いつの時代でも、またどんな社会においても、それぞれに特有の難しい課題があり、それらを克服しようとする人びとの努力がありました。しかし、現代社会の一つの特徴は、その努力を傾注すべき課題の対象が一個人から地球全体までに及ぶ、かつてない大きな幅と奥行きをもっていることにあると言えます。これからの社会により必要なのは、人間一人ひとりのきずなであり、共同／協働のこころです。身近な課題に地道に取り組むと同時に、一地域、あるいは一国の範囲を越えて、人類としての共通性を見出しながら、世界的視野のもとに問題意識を共有していくことが重要です。

こうした認識に基づきながら、トヨタ財団は自信と希望に満ちた社会をつくるための一助となるべく、時代を切り拓くという強い使命感のもとに、今後もさらに活発な助成活動を行ってまいります。

「地上に本来道はない。歩く人が多くなればそれが道になる」(魯迅『故郷』より)という言葉があります。「人間のより一層の幸せ」につながる道がいたるところに数多くできることを待望するとともに、その道をつくることにできるかぎりお役に立てるよう、よりよい未来へ向けてトヨタ財団の活動展開をはかっていく所存です。

JOINT September 2010
No.4
【ジョイント】



Photo by Isao Tsutsui

突然の豪雨のあと、ふと空を見上げると、雨雲の切れ間からまっすぐに太陽の光が差し込んでいた——。今号の表紙は、タイ在住の助成対象者・筒井功さんから届いた「彩雲」の写真。よく見ると架け橋のように空にかかった雲が虹色に輝いています。空に国境はなく、太陽の光は地上にあまねく降り注ぐ。そんな当たり前の事実を再認することから、よりよい未来はひらけてくるのかもしれない。

CONTENTS

FIRST WORD ● 加藤広樹
新法人としてのスタートにあたって …… 2

特集：Vision 2010 よりよい未来へ向けて

トヨタ財団 豊田達郎会長は語る
たくましく、心あたたまる活動の継続を …… 4

【座談会】よりよい社会のビジョンを求めて——
石 弘光×末廣 昭×遠山敦子×藤井宏昭
人間としての価値の創造を …… 6

Vision 2010 トヨタ財団の描くこれからのビジョン
よりよい未来を構築するために …… 12

寄稿●山岡義典
日本におけるフィランソロピーと
新公益法人下における助成財団の役割 …… 14

活動地へおじゃまします！
島々をつなぐ織り手ネットワーク …… 16

JOINT ホット・インタビュー ● 井上将太
ギアチェンジしながら楽しく暮らす …… 19

【温故知新】「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成❶
明日をひらく「本」の力 …… 22

トヨタ財団ジャーナル …… 25
プログラムの公募開始 / プログラムの応募状況 / 助成金贈呈式開催 / 高知シンポジウム開催 / 出版物のご案内

地域社会プログラムマップ
2009年度 助成対象プロジェクト一覧 …… 28

特集 Vision 2010

世界は今、急激な変化の波にさらされている。日本は、そして私たち人間の未来はどうなっていくのか。

本号では、トヨタ財団の公益財団法人への移行に合わせ、

これからの社会のあり方、財団の活動の方向性を会長の談話とともに探ってみたい。

よりよい未来へ向けて

はじめに

トヨタ財団は1974年に設立され、それからほぼ36年が経過いたしました。設立時と現在の社会状況は大きく変化しています。また一方、財団の組織形態につきましても、一昨年12月1日に新公益法人制度が施行され、トヨタ財団も公益財団法人へと移行することとなりました。財団の今後のあり方について原点に立ち返ると同時に、今までのプログラムにとらわれずに新たな展望を考える必要があります。

そのような背景のもとに、財団としての公

益性をより明確にして、今後の方向性を確立するために、財団理事・評議員の方々9名によるビジョン懇話会を2008年に設置させていただきました。そしてこれまで、新公益法人としてのビジョン策定をめざした会合の場を6回ほど開き、忌憚ないご意見をいただき、議論を重ねてまいりました。

そしてその後も、さらに密度の高い協議を行った結果、本年6月の理事会・評議員会で

トヨタ財団ビジョン2010「よりよい未来を構築するために」(12ページ参照)の策定に至りました。ここにその基本的考え方と見解の一部を紹介し、読者の閲覧に供したいと思います。

トヨタ財団プログラムディレクター
渡辺元

*6～11ページの「座談会」は、このような経緯をふまえて、トヨタ財団理事4名(内「ビジョン懇話会」メンバー3名)により行われたものです。

バックの写真は「座談会」の行われた日、トヨタ財団会議室から眺望した大都市・東京

たくましく、心あたたまる活動の継続を

公益財団法人への移行という一つの節目を迎えたトヨタ財団。よりよい社会、夢のある未来を築くために、私たちがなすべきこと、できることはなにか。財団設立時の理念をふまえ、今後の財団に託す会長の想いを語ってもらった。



トヨタ財団の設立にこめられた、トヨタ創業者たちの想いについてお聞かせいただけますか。

トヨタグループの創始者である豊田佐吉翁の考えをまとめた「豊田綱領」というものがあります。佐吉翁6回忌に息子の豊田喜一郎らが起草したのですが、グループ各社の社是として今日に至るまで受け継がれています。そのなかに、他者を敬い、社会

の専門家を置く制度を取り入れましたが、これも林先生が考えたことで、トヨタ財団の基礎を築いてくださった林先生には、たいへん感謝しています。

私は豊田英二、林雄二郎先生が築いたそんな財団のよき面を、引き続き大事にしていきたいと考えています。一特定企業の利益のためではなく、トヨタ財団は社会のために存在する財団である、という認識がなによりも大事です。

設立から現在に至るまでのトヨタ財団の活動を振り返られて、いかがですか。

いろいろありますが、特に設立間もない時期からアジアへの助成を行っていたことは、有意義な活動だと思えます。当時は、多大なご苦労もあつたようですが、東南アジアへの助成では、亡くなられた石井米雄先生（京都大学名誉教授）がご尽力くださいました。それらの努力が日本と東南アジア諸国との文化的な交流の促進につながったことは、たいへん大きな成果だったのではないのでしょうか。

それ以外にも、国内外において設立から現在に至る36年間で7000件以上の助成を行うことができました。これらの方々に、改めて応援の言葉とお礼を申し上げたいと思います。また、現在においても毎年多くの応募をいただいております。気持ちの引き締まる思いがしています。

今後の財団の活動において、どのようなことが重要なポイントになるとお考えですか。

三つのことを考えています。一つは、「継続は力なり」です。アメリカの財団などに比べるとまだまだ規模が小さいですが、身分体力に合ったことを、まじめに着実にやり続けていくこ



●聞き手：野々宮彰彦（トヨタ財団事務局長）

への恩に報いるという感謝の気持ちの大切さが説かれています。私自身もトヨタ自動車の経営者の一人として、また、トヨタ財団の会長として、この綱領の精神（こころ）を大切にしていかなければならないと思っています。

また、トヨタ自動車創業者である豊田喜一郎は、日本における自動車産業を自らの手で興すことで社会に貢献することをめざしました。基幹産業としての責任感を常に持ち、利潤追求だけではなく、企業をより豊かな社会を築く礎としていくことが経営の基本理念だとの考えからです。このように、創業者たちの想いがトヨタの社会貢献の根底に流れているのです。その想いが前面に現れたのがトヨタ財団といえるでしょう。

当財団の他にもその意思が形になったものとして、同時期に設立された豊田工業大学があります。大学では教育によるものづくりの大切さを継承できるひとづくりを、トヨタ財団では助成活動による、よりよい社会づくりをめざしたのです。

トヨタ財団を設立された豊田英二最高顧問が、トヨタ財団に託されたのはどのようなことなのか、会長のお考えを教えてください。

豊田英二は、トヨタ財団の設立に際して「企業が今日あるのは、社会の恩恵を受けてであり、そのお返しとして広く公共のお役に立つことをしたいと考えるのは、ごく当然のことであり、財団の設立は、その一つの方法である」と言っています。つまり、車で得た利益を社会に還元する必要があると考えて財団を設立したのです。

また、設立当初より、企業の利潤追求とは独立した財団を作ること考えていたようです。豊田英二は、当時東京工業大学社会学科教授であった林雄二郎先生にトヨタ財団の骨格づくりを一任しています。設立当初、暗中模索するしかない状況のなかで、林先生にはずいぶんご尽力いただいたと聞いています。トヨタ財団では、日本ではじめてプログラムオフィサーという助成業務

とが大切です。

二つ目は、現場を大切にすることです。トヨタ財団もプログラムオフィサーが現場の人とともに考え、よいプログラムを作ってきました。今後も現場の方々の声をよく聞いて、現場の方々とともに、自信をもって活動をしてほしいという気持ちを強く抱いています。

三つ目は、他の組織や人との連携です。今後も助成対象となる方々、他の民間財団など社会のさまざまな組織や人びととの連携を深めて、より活動の幅を広げ、質を高めていくことが大切だと思っています。

最後に、これからの財団活動に期待することをお話ください。

これまでは、アジアへの助成活動を多く行ってきました。とてもよい成果をあげていると思います。しかし今は、環境問題をはじめ、文化や経済における社会の問題・課題は地球規模でひろがっている時代です。これからは、さらにより広い地域を視野に入れて助成活動を展開すべきだと考えています。

それと、この財団が活動を通して、一企業が接するお客様をはじめとしたステークホルダーとはまた違った社会の方々と接することができるのは、とても貴重なことです。そのような方々と財団活動を通じて接するなかで、現代社会の課題を冷静に受け止め、よりよい未来を築くために、たくましく、そして心あたたまる活動を継続していくことが、トヨタ財団の重要な使命であり、役割だと思っています。



遠山敦子

藤井宏昭

よりよい社会のビジョンを求めて
石 弘光 × 末廣 昭 × 遠山敦子 × 藤井宏昭

座談会

人間としての 価値の創造を



石 弘光

末廣 昭

ビジョン懇話会の意義

末廣 まず遠山理事長から、トヨタ財団とビジョン懇話会についてお話をいただけますか。
遠山 公益法人にはさまざまなものがありますが、トヨタ財団は、日本を代表する大きな民間企業がバックにある財団です。これまでの36年間、非常にいい仕事をしてきたと高い評価を受けています。企業がバックにあるとはいえ、トヨタ財団は企業メリットの追求を目的にしたものではなく、広く世の中の役に

立つために「人間のより一層の幸せを目指して」という理念を掲げています。また、運営についても財団に一任されており、民間の知恵と意思によつてこの世の中のためにつくすという高い志があります。

その理念と志に基づいて、今後さらに、この社会、この日本、この世界のよりよい発展と幸せのために何かお役に立ちたいという角度から、私たちがすべきこと、できることを考えたい。これまでの活動をベースにしながらも、よりシャープに、より世の中に役立つ新しい視点や活動があれば見つけ出して助成

心は、これからの日本をどうするかといったことでしょう。しかし、めざすべき方向性が明確じゃないんですね。日本全体が自信喪失に陥っていると言われるのは、未来への見通しが立たないからで、今後どういう方向に進むべきかをきちんと議論していくことが大事。官民をあげて知恵を出し合い、方向性を模索することが必要です。トヨタ財団もそんな時代の流れのなかに身を置いているという自覚のうえで、助成活動のあり方を問い直していくべきでしょう。そういう意味で、ビジョン懇話会で専門家が集まり議論できたことは、新たな活動の「発射台」としての意義があったし、私自身もずいぶん勉強させてもらいました。

藤井 私としてもこの懇話会を同様にとらえています。トヨタ財団は基本理念がしっかりとっていることを、まずは強調しておきたいと思います。74年設立時の理念が今でも通じる。その理念の根本は人びとの幸せを願い、世界的規模で活動を行うということにある。世界的規模、あるいは世界的視野で人びとの幸せを考えていくことは、今後ますます重要になってくると思います。

経済の停滞と自信喪失の時代に

末廣 ところで、一つの社会情勢としては、70年代にはいった頃から、急速に日本企業のアジアへの進出がはじまりました。72年にはタイで反日運動が起こりますが、私のタイ研究がスタートしたのもこのときからです。企

業のアジアでの事業展開が本格化したわけですが、進出した国の社会状況とか、文化や人びとの心情がよくわからなくて日本の企業人たちは苦労していた。そんな頃に、トヨタ財団の国際助成や「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成といった、アジアとりわけ東南アジアを対象とした助成プログラムがあつて、次々とよき成果があがり、人材も育つていった。

しかし、さすがに30年以上経ちますと、日本企業が出ていっている相手国の社会の様子を知り、日本がアジア諸国を一方的に指導するといった時代ではもはやありません。また、日本がアジアのことを知識として学びさえすればよいということでもなく、今は、新しい形でアジア諸国との関係をつくっていく時期にきていると思います。

さてそこで、日本社会および、現代という時代に世界が直面しているどのような点に着目して、日本の今後の方向性と財団のビジョンを考えていくべきだとお考えでしょうか。
石 ぼくらは、終戦後の混乱の時期から、経済成長を経て日本が輝けるトップになるまでの足どりを経験している世代なんです。自分の成長と日本の成長の足並みがそろつていた、ある意味で非常にハッピーな世代。

今の若者は、自分が成長しても日本全体が落ち込んでいく。これでは、自信喪失に陥っていくのも無理はありません。かつてはさまざまな点で、日本というのはまさに注目の的だったし、国際比較するとき必ず日本が上位に入っていた。今は、国際比較したとき日本つ

て落つこちてしまふんですよ。

そういう状況のなかで、日本がサバイバルというか再デビューするためにはどうするか。そんなことのとっかかりになるような議論がほしいし、研究もほしいなと思つています。若者が自信をもつきっかけとなる何かしてほしい。

遠山 バブル崩壊以後は、自信喪失の時代がずっと続いてきたのではないかと思います。石さんがおっしゃったように、日本のプレゼンスは今、国際的にほんとうにひどいところまで落ちている。実際の實力以下に落ち込んでしまつている。

しかしながら、ここで皆が立ち上がれば、まだまだ日本は世界のなかで新たな存在感を示せるはずだと私は思っています。たとえば、これまで保つてきた勤勉性とか、進取の気性とか、ものを創りあげる力や文化面など、日本にもまだまだ皆さんの優れた面があるのです。ただし、日本を総体として見たときに、マインナス面がいっぱい出はじめたということには、はつきり認識しないとイケない。

まず、政治の混迷。そして経済の停滞です。日本国内で生産するよりは、海外に出て行つて、海外の工場を製造し、利益も海外でという状況を放置してよいのか。しかも中国や韓国の新しい国家戦略的な産業の力に押されている。国内で経済を回復する方法があるはずなのに、その戦略がなさすぎませんか。

それとここで特に申しあげたいのは、人びとの生き方と関わる「こころ」や「情」の問題。これはあげたらきりがありませんが、た



●遠山敦子(とおやま・あつこ) 財団法人新国立劇場運営財団理事長、トヨタ財団理事長。1962年東京大学法学部卒、文部省(現・文部科学省)入省。文化庁長官、駐トルコ共和国大使、国立西洋美術館館長などを歴任し、2001年4月より文部科学大臣を務める。教育、文化、科学などの分野に携わる。主な著作に、『こう変わる学校 こう変わる大学』(講談社)などがある。

たとえば、今日では若い人に職がないという残酷さ、それに低所得であるが故に万引きとか窃盗とかの犯罪に結びつく社会の不安定さ、社会との接点を失い、一人ひとりが孤立したあげく孤独死とか自殺とかに追い込まれるような、きわめて悲惨なことが方々で起きている。つまり政治の行き詰まりや経済の停滞が、メンタルな面も含めて人びとから暮らしの豊かさやゆとりを奪っているような気がしてなりません。回復する方法がまったくないとは思いませんので、その方法についてここで論じていただきたい。

エコロジィ、多文化共存、平和構築

藤井 おっしゃるように、さまざまな問題が

ています。

末廣 今、藤井先生からエコロジィ文化、異文化を内在化してきた歴史、非軍事による平和の構築という、三つの非常に重要なポイントが指摘されました。そこに希望の芽があるのではないかと。

話は少しとびますが、じつは昨日ある結婚式に出たんです。でも、今や結婚した兩人に対して「おめでとー」と素直に言えない時代状況なんですね。これから子どもを出産する人や、生まれてくる子どもたちに対しても同様でしょう。おめでとーと言いつらくなつた。これほど不幸なことはないと思いました。結婚式で心から二人の若いカップルに対して祝福のメッセージが言えないのですから。タイでも今問題になっているのは、高齢者よりも

●末廣昭(すえひろ・あきひろ) 東京大学社会科学研究所所長、トヨタ財団理事。1974年東京大学経済学部卒。東京大学大学院を経て、アジア経済研究所、大阪市立大学経済学研究所助教授、東京大学社会科学研究所教授等を歴任。2009年より現職。専門は、アジア社会経済論。東南アジア特にタイに関する経済研究、地域研究を専門とする。主な著作に『タイ——中進国の模索』(岩波書店(岩波新書))などがある。



複雑に絡み合い関係していますが、私は情報の共有化とグローバル・ガバナンスという視点から考えてみたい。データ処理や通信技術の発達による「情報革命」のおかげで、海外の出来事が遠くにいともリアルタイムで実感できるようになった。みんなで共有できる情報が増え、各国の共通性と違いがはっきりと掴めるようになってきた。人類は、非常に困難なこの時期に、平和を保ちながら生き延びていけるかもしれないという希望の一つを、私はそこに見たいのです。

そして、そういう状況のなかで重要になってきているのが、グローバル・ガバナンスです。ガバナンスは日本語で統治と訳されますが、グローバル・ガバナンスの主役は必ずしも政府だけでなく、企業であり、マーケットであり、非営利団体であり、個人である。当事者全体のつながりのうえで機能するのがグローバル・ガバナンスなのです。

グローバル・ガバナンスを達成していく過程で何が起きるかという点、それぞれの固有の、自己の文化も意識するでしょうし、保護しようとするでしょう。それは正しいことですが、それと同時に、世界が共有できる共通の文化が芽生えてくるのです。逆に、芽生えてこないグローバル・ガバナンスはうまくいかない。

その見地から見ると日本の役割は大きい。エコロジィの文化というのは、縄文時代以来、江戸の文化もそうですし、ずっと、今日の日本において続いています。先進国のなかでもっともエコロジカル。また、「もつたいない」

若い世代の自殺なんです。どの国も似たような状況にありますね。

日本固有の問題だけでなく、アジア全体に共通する問題、それを手がかりにしないとこれからはアジア諸国とつながっていけない。確かに、中国とかインドはものすごいバイタリテイがあります。でも、その一方で、中進国化するアジアという目でアジアを見ていかないといけない、と私は思っています。中進国化するアジアに対して、日本がもつとメッセージを発信すべきなのです。途上国として貧困が最大の課題であるアジアという視点ではなく、中進国として、社会がすごいスピードで変化するアジアに対して、日本は過去の経験から何かを伝えていくべきなんです。アジアの今の若者は、思いのほか希望をなくしているという気がしています。

人間の価値とライフスタイル

石 高学歴でない人が自分の力と技ではいあがつてきて、頂点に立つみたいなのが、今は日本を含めてアジア全体でなくなつてしまった。それが最大の閉塞感のもとでしょう。今、日本は下流社会。実感として根底にあるんだよね、それが。昔は、下流から中流へいって、上流に行くことができたんですよ。でも今は、下流は下流でとどまっちゃつていく。親は親、子は子、孫は孫で同じところにとどまってしまう。下から上へというルートをどうやって再生するか。これが、一つの目のつけどころであり、閉塞感を打ち破る一つ



●藤井宏昭(ふじい・ひろあき) 独立行政法人国際交流基金顧問、森アーツセンター理事長。トヨタ財団理事。1956年東京大学教養学部中退。1956年外務省入省。1983年香港総領事、1992年駐タイ国特命全権大使、1994年駐英国特命全権大使などを歴任。1997年国際交流基金理事長を経て、2003年より国際交流基金顧問、2004年より森アーツセンター理事長。外交、文化政策を専門とする。

という思想というか気持ち、それを日本は独自のものとして持っているし、ビジネスに変えていく力も持っています。

もう一つは、日本がいろいろな異文化がまじりあう国であることでしょう。日本は伝統文化をずっと保持しながら、時に応じて他の国の多様な文化を内在化して自分のものとしてきた歴史を持っている。その経験を活かすことで、日本がグローバルに世界に寄与できるのではないかと思うのです。

さらに、もう一点。われわれは、日本の平和文化に対してもっと誇りを持つてよいと思う。世界平和の構築のために、日本が率先して貢献できることがあるのではないか。よりよい21世紀を形作つていくために、日本の持っているポテンシャルはとて高いと思つ

の鍵じゃないかと思っています。

遠山 同感ですが、では上にいったらどうなるのか。今の若者たちは、上昇意欲さえなくしてきている。自分はもう偉くなんかならない、偉くなつたつて責任が重くなりたいたいへんになるだけだからと言う日本の若者が、今実際に増えているのです。

そういう若者たちに希望を持たせるにはどうすればよいのか。下から上へあがつていくルートを再興することも大事ですが、それだけでなく、なんというか、人間としての新たな価値を創造していけるような社会にして、地位や収入を高めることは異なる、もうひとつ別の希望を育てたいと思うのです。10年後、20年後にアジアないし世界の若者が陥る「こころ」の面も含めた状況を日本が先取り

●石弘光(いし・ひろみつ) 放送大学学長、トヨタ財団理事。1961年一橋大学経済学部卒。一橋大学大学院を経て、同大学講師、助教授、教授を歴任。1998年学長に就任。2007年5月より現職。政府税制調査会会長などを務める。専門は、財政学。著作『財政改革の論理』(日本経済新聞出版社)でサントリー学芸賞を受賞。



して、日本はかく直面して、かく解決したという、ほんとうの希望を示すことができるよいなと思うのですが。

末廣 今言われた、人間の価値という側面への研究や支援は、トヨタ財団の大きな役割ではないかと思えます。人間が生きていること自体の価値や意味を、人間の幸せという原点からもういちど考え直し提起していく——。

藤井 ある人の言い方を借りますと、日本は課題先進国。日本が今抱えている課題とその悩みは、アジアや世界から見てもかなり先進的だと思います。妙な言い方もありませんが、世界の若者がこれから苦しむであろうことを先に苦しんでいる。人間の価値といったことは、経済的に進んできていく国が行き着く先で必ずぶつかる問題であり、苦しみであるといってもよいのではないのでしょうか。

そこで、何が人間の価値かという一種哲学的な問題ですが、生活に引き寄せて考えると、私はライフスタイルをもう少し自覚的に検討していくべきだと思つていきます。しかも、個人の生活範囲を越え、日本や世界全体のスケールで考えていくべきだと思つ。たとえば



写真撮影：川村容一

が出てきているでしょう。むろんそんな人たちばかりではないけれど、たとえば、そんな人たちに限って公共施設で他人の迷惑を省みない、公共のものを大事に扱うことを知らない。大人がそういうことをきちんと教え直し、養成していかなければいけない。

地に足をつけ、新たな活動の展開を

末廣 トヨタ財団の活動趣旨のなかには「世界的視野で」という言葉があります。ビジョン懇話会で、アジア以外にも、アフリカとどうつきあうか、中東とどうつきあうかの検討も必要だと問題提示がありました。この点については、どう考えますか。

藤井 これからも、成長地域であるアジアに主力を注ぐのはいいと思う。ただ、アジアといった場合、もう少し、中国、インドでの助成を拡大していくべきではないか。アジアが、たとえば特に中国が今後どういう文化をつくっていくのか、これからの世界にとつても重要です。中国のインテリ層と話していると日本の文化が好きの人が多いいんですよ。

環境問題ひとつをとつても、どういうライフスタイルだとより環境に対する負荷を小さくできるかというようなことが重要です。ライフスタイルが環境にも大きく影響していくわけですから。

また、日本は世界でもっとも人が混み合っているところでのライフスタイルを構築している。自然を敬い、狭い生活空間のなかで隣りの人と肌を接し合いながら、お互いに礼儀と尊敬をもって生きてきた先進的な国。そのあたりをさらにどう自覚し、これからのライフスタイルとして深めていくか……。

公共のモラルを養成する

末廣 自然と社会がうまく折り合つて生きてきたつてことですよ。

遠山 人と自然、社会もそうですし、人と人との関わり合いにおいてもそうです。お互いに敬い、助け合うということ。その意味では、ライフスタイルというのは一つの文化であり、価値であると言つてもいいと思えます。これまでの伝統的なライフスタイルを尊重しながら、今日的なライフスタイル、一人ひとりが卑屈にならず、誇りを持てるようなライフスタイルを模索し実践していくことが大切だと思えます。それには、ワークライフバランスも大事ですね。

もつと自分の生き方に余裕を持てる、ここでは、ゆとりという言葉を使つてもいいかもしれませんが、人間が各自の人生観において、誇りとゆとりを持つて生きていけるライフス

そのあたりで、何か財団でできることがあるのではないかと思うのですが。

石 ぼくは、アフリカも視野にいれるべきだろうと言つたことを覚えていきます。ある程度アジアを重点的なテーマにしていくのはよいと思う。ただ、別の視点、たとえば資源国ということによって日本にとって魅力あるのは、アフリカですよ。また、日本にはアフリカ研究の蓄積が少ない。ご存知のように、中国は国家をあげて、アフリカです。戦略的にいえば、アフリカ研究者を育成して、アフリカ研究を深めていくのはいいのではないかな。

遠山 トヨタ財団には、研究助成と実践活動への助成があります。実践活動への助成を世界にひろげ増やすのは、実際問題としてなかなか難しい。しかし、研究については、アジアやそしてアフリカにももつと対象をひろげていいのではないかと思えます。研究範囲をひろげ、かつ深めて、その後、実践活動への助成を展開するという形で。

世界的視野ということでもう一つ提案したいのは、世界が抱えている課題について、トヨタ財団が世界の英知を集めて、シンポジウムなどをやってはどうかということですよ。21世紀のこれからの世界をどうやってよりよい世界にしていくか、そのために協働できることはないかという観点から、対話や議論の場をもつのも意義のあることだと思つています。

石 トヨタ財団にしかできないことをやるべきですよ。たとえば、国際的に権威ある京都賞というのがありますが、トヨタ財団ならではのなにかそういう賞を設けたり、トヨタ

スタイル——。脈々と続く文化をそのなかに溶け込ませながら、日本人の一つの生き方、モラルを基本にもつた生き方を世界に示すことができるれば素晴らしいと思つています。そこには他者を知ること、そして他者を助ける、困っている人たちに対する貢献が含まれる。

もう一つは、「価値の創造」と言つたときのクリエイティブティに関して、日本の若者が何も打ちひしがれることはないと思つています。クリエイトすることやクリエイトする場はいっぱいあるのです。たとえば科学技術において、最先端のナノテクノロジーとか、バイオテクノロジーや宇宙などの分野もそうですし、もう一方で、私は舞台芸術、劇場関係のことに携わっていますが、そういう広い意味での文化や芸術、ものづくりの世界でも、次々と創造することがあるし、挑戦する価値があります。

石 お話を聞いてみると、日本はまだまだ頑張れる、日本にはいいところがある、とエールをおくつていらっしゃる感じがします。その気持ちを忘れてはならない。私は、社会の根っこにある仕組み、慣習が大事だと思う。パッチワーク的な細切れの対処療法では社会の大きな変革にはつながらない。だから、ライフスタイル、つまりわれわれ日本人の生き方や慣習の次元から問い直し、鍛え直していく必要があるという指摘は、よくわかります。

それとモラル、倫理。公德心、公共心がないですよね、今は。ただのエゴで動いている若者たちが多いです。そもそもその親の世代から、エゴで育つたモンスターペアレント

財団国際フォーラムとか、何年かに一回くらいやつてもいいのではないですか。

今、トヨタ財団は「草の根」的な活動の支援に力をいれている。これはこれで意味のある立派なことですが、ときには国家再生いかにあるべきかみたいな世界に対するメッセージの発信、発言をどーんとやるべきでは。

遠山 たしかに財団が取り組むべきテーマはたくさんあります。少子高齢化とか、都市化の問題、さつき話に出た情報革命の今後とか。それと、やはり文化の継承と創造。モラルの低下の問題。今、世界はどこを見てあまりにお金中心主義になりすぎています。拝金思想。お金には代えられない価値をどこに見出すか。

末廣 さつきライフスタイルや環境の話題が出ていました。それぞれの社会がもつていた自然と人の調和、それが世界的な規模で壊れてきている。トヨタ財団としてどういう形でそれを受け止め、実際の活動につなげていけばよいのでしょうか。

遠山 全体に通じるキーワードは、やはり世界の時空をこえた「共生」なのでしょう。藤井 くり返しになりますが、トヨタ財団がこれまでやってきたことは、ある意味で地味だけど、とてもいい仕事が多い。地に足がついた活動を着実にやってきた。それはそれで大事にしてほしい。その実績と歴史をふまえたいと思つています。

末廣 ひとまずの結論が出たようです。本日はありがとうございました。

◆ よりよい未来を構築するために ◆

トヨタ財団は、1974（昭和49）年の設立以来、「人間のより一層の幸せを目指し、将来の福祉社会の発展に資する」ことを目的に、生活・自然環境、社会福祉、教育・文化等に関する研究ならびに事業に対してさまざまな助成を行って参りました。

近年、財団を取り巻く社会の状況や環境は大きく変わりつつあります。しかしながら、そうした変化に追隨的に対応するのではなく、変わりゆく社会の現実を深く見詰め、その中から将来への可能性となる萌芽を積極的に見出し、公共の福祉と社会の発展へとつなげていくという民間財団としての役割は、設立当初から変わらぬものと信じております。

このたび、私どもは公益財団法人として再出発することになりましたが、民間助成財団としての初心を忘れず、勇気をもって新たな一步を踏み出していく所存です。

◆ 困難な時代にあって

21世紀の最初の10年を終えようとしている今、世界は20世紀後半以降の大きな変化を経験しつつ、これまでとは異なる新たな局面に直面しています。科学技術の進歩とグローバル化の急速な進行の一方で、地球規模の環境問題の発生、財政・金融危機の頻発、安全な水・食料の不足、国際テロや大量破壊兵器の拡散など、人間の安全を脅かすだけでなく、人間の存在そのものへも大きく影響を与える問

題が多数出現し、それらへの取り組みが求められています。

それぞれの問題に取り組んでいくためには、活動領域（地域社会、国、国際社会）と活動主体（政府のみならず、企業や民間非営利組織など）を適切に選り取り、地域社会や国の背後にある歴史やこれを支える文化に配慮しつつ、それらの社会を形成していくための新たな技と方法を模索していくことが不可欠です。人と社会の望ましい未来の実現に向けて不断の挑みが続けていくことは、次世代に対して、今を生きるすべての人びとに課せられた大きな責務であると考えます。

◆ 新たななぎずなを求めて

社会の変化が速く、また変化の振幅も激しい現在、個人、地域社会、国ぐにの対等で緊密なつながりは分断されがちな状況にあります。人と社会の望ましい未来にとって、まず何より大切なことは、一人ひとりの個人が自立し、自らの責任において行動し、社会に貢献することであると考えます。それと同時に、人と人のつながりを再構築し、信頼と連帯で結ばれ、互いに支え合って生きる社会を実現していくことが、これからの大きな課題であると思われまふ。そのためには、個人の自助・自立を前提に、「他者」との関係を豊かなものとし、従来のような血縁・地縁にもとづく関係を超えた「新たななぎずな（柔らかななぎずな）」を創りだしていくことが肝要だと考えます。

こうしたなぎずなを基本とする舞台は、家族や身近な地域社会から国際社会に至るまでの多様なコミュニティに及びますが、それを構成する人や自然・文化をめぐる新たなつながりを探求し、その創造へ向けた取り組みを通して、安心・安全な社会の実現に寄与していくことをめざしていきたいと考えます。

◆ 安心・安全な社会の実現に向けて

人びとの参加とつながりを促し、新たななぎずな形成を通じて互いに支えあう、安心・安全な社会の実現に向けて、以下の点に取り組んでいきたいと思ひます。

1. 支えあいと協働をめざして

私たちは、一人ひとりが尊厳を保ちつつ、希望をもつて生きられる社会の実現を希求します。そのために、多様な価値観やあり方を相互に認め合い、さまざまな国や地域の中に蓄積された知恵を結集し、人がつながりをもつて生きうる社会を構築する試みを応援します。とりわけ、将来をになう次世代を育む先駆的な活動を応援します。

2. 新たな社会を形づくるために

人びとを取り巻く環境が大きく変わる中、社会を形づくっていくための新たな制度や手法などが求められつつあります。社会運営の主体を国に限らず地域や民間にも求め、それら主体の分担と協働によって新たななぎずなを創出することが必要だと考えます。そのために、地域や民間を活動基盤とする意欲的な試みを応援します。

3. たくましい明日を拓くために

今日の世界では、グローバル化の波に乗って広がる環境問題など、さまざまな問題が、人びとや地域社会の安心と安全を大きく揺さぶりつつあります。特定の地域や国ではなく、国際社会全体が直面するこうした問題に積極的に取り組み、いのちと暮らしを豊かにし、未来へとつながる試みを応援します。

4. 文化の継承と創造に向けて

ひとは、古来より自然と調和を図りながら日々の暮らしを営み、また、それぞれのかかわりの中から文化を紡ぎだすなど、安寧な暮らしを得るためのさまざまな工夫を行ってきました。こうして培われてきた文化の継承と発展に貢献するとともに、新たな文化の創造に寄与するた

めの取り組みを応援します。

以上の考え方に基づき、現状の課題解決への取り組みのみならず、《いまの課題》の中に潜む将来の《変化のきざし》をつかみ取る課題発見型の取り組みや、現状の変革につながる政策的な取り組みなど、民間助成財団としての特長を十分に生かした先駆的・未来志向的な助成をより一層推進していきます。

2010年6月9日

公益財団法人 トヨタ財団

日本におけるフィランソロピーと 新公益法人下における 助成財団の役割

● 山岡義典（法政大学現代福祉学部教授）

日本のフィランソロピーの社会・文化的 背景と旧来の公益法人制度の影響

日本にはフィランソロピーという言葉の適切な訳語こそないが、それに類似あるいは相当する行為は古来さまざまな形で存在し、その一面を指し示す言葉も多様に存在した。

私がトヨタ財団にいた頃（1977年4月～92年3月の15年間）、自らの財団活動の思想的根拠を求めて、その源流や現代的な意味を模索したが、その結果、日本のフィランソロピーを社会・文化的に考える上で、次の7項目が重要と思うに至った。すなわち、①古代から現代に至るまで連続と続く地縁社会の濃密な相互扶助の伝統、②古代から現代に至る宗教的な伝統の不連続性、③古代と近代の天皇制のもとで特徴的な恩賜・報恩の心的構造、④近世後期から全国に展開する地域的な社会救援活動、⑤同じく近世後期から主として都市を中心に普及した文化支援活動、⑥近代の企業家の社会貢献から現代の企業の社会貢献に至る展開、⑦1980年代から顕著に

仕組みになった。公益法人に認定されると寄付金控除を含めたさまざまな税制優遇が得られる。制度としての複雑さなど問題は残るものの、民間公益活動がタテ割りの支配から解放され、寄付を促進する環境が大きく改善されたことは間違いない。そこには「民間公益」としての新しいフィランソロピーの世界の誕生が、期待される。

すでにこの制度のもとで新しい一般法人が誕生し、その中から公益認定を受けるものも出てきているが、主務官庁のもとで生れ育った既存の約24000の公益法人（社団法人・財団法人）については、施行後5年内（2013年11月30日まで）に一般法人か公益法人に移行申請しなければならぬ。さもなくば解散ということになる。この移行には、内閣府の公益認定等委員会や各都道府県に置かれた審議機関への諮問によって、「一般」への移行なら認可が、「公益」への移行なら認定が必要になる。その手続きが遅々として進まない状況に懸念もされたが、この4月からはいくらか改善されてきたようである。

【*1】その内容は山岡「ボランティア活動の歴史的背景」として『ボランティア学を学ぶために』内海成治・他編1999（世界思想社）に所収（P.22～40）。要点については『NPO 基礎講座 [新版]』山岡義典編著2005（ぎょうせい）にも所収（P.25～33）。

【*2】これらの成果は『日本の財団—その系譜と展望』林雄二郎・山岡義典著1984（中央公論社（中公新書））、『日本の企業家と社会文化事業—大正期のフィランソロピー』川添登・山岡義典編著1986（東洋経済新報社）、『フィランソロピーと社会—その日本の課題』林雄二郎・山岡義典編著1993（ダイヤモンド社）などとして発表してきた。

【*3】市民公益の概念は『市民公益活動基盤整備に関する調査研究』1994（総合研究開発機構）が初出。研究代表者は木原勝彬、総括委員長は山岡が務めた。後のNPO法やNPOセンターの基礎になる考えを提示した。

【*4】主務官庁と財務省の合議で認定して寄付金控除を付与する制度で、1962年に試験研究法人等として発足、1988年に現在の名称に変更。認定は極めて限定的である。

なる市民活動の台頭とその潮流、の7項目である【*】。

このうち私なりに認識を深めることができたのは③⑥⑦の一部でしかないが【*2】、ここで確認したのが、これらの歴史的背景に覆いかぶさるような形で近現代のフィランソロピーに影響を与えているのが、1898年（明治31年）施行の民法による公益法人制度であるということであった。それは、民間の非営利・公益的な活動は主務官庁の指導・監督のもとにタテ割りで行われるべきものという発想を根幹としている。第二次大戦後には特別法による公益法人制度もいくつか誕生するが、それらも基本はこの精神の延長線上にすぎない。当然のことながら、フィランソロピーは官庁の都合のよいように発展し、多数の外郭団体を生み出す温床となってきた。

官庁公益から市民公益に向けて

トヨタ財団発足後20年近くの挑戦は、いわばこの「官庁公益」の精神からの離脱にあった。その離脱の行き先を「市民公益」として

そのような中、助成財団については、公益目的事業に馴染みややすいこともあって比較的順調に申請が進み、公益認定を受けるものも次第に増えてきた。多くの助成財団が主務官庁の枠から解放され、「公益目的事業」としての制約はあるものの自由な公益活動が可能になった。これまでの特定公益増進法人（通称「特増」）【*4】のような事業項目の制約を受けなくても、寄付金控除が得られるようになった。110年慣れ親しんだ「官庁公益」の精神からの離脱は容易ではないであろうが、公益財団法人となった助成財団には、新制度の可能性を大いに生かして真の「民間公益」の担い手となり、その基盤でもある「市民公益」を力強く育てる役割を果たしてほしい。今後の持続的な発展に向けて、大きく期待したい。

公益財団法人として再出発したトヨタ財団への期待

トヨタ財団も、いち早く移行申請の準備に着手し、この3月末には公益認定を受け、

● やまおか・よしのり
1941年旧満州生れ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院にて都市計画学を専攻。1977年トヨタ財団プログラムオフィサーとして研究助成や市民活動助成のプログラムを開発。1992年トヨタ財団を退職。フリーのコンサルタントとしてNPOに関する調査研究や政策立案に関わる。1996年11月、日本NPOセンター設立、事務局長・常務理事就任。2004年に副代表理事、2008年代表理事。2002年には企業フィランソロピーの新しい仕組みとしての資金仲介組織「インタミディアリ」市民社会創造ファンド」を設立、運営委員長に就任。2001年より現職。

言語化できたのはトヨタ財団を去った後のことであったが【*3】、言葉にできない思いは常に抱き続け、財団の内外で議論を深めてきた。

この「市民公益」の精神を制度として実現したのが、特定非営利活動促進法（通称NPO法）の立法化による特定非営利活動法人（通称NPO法人）の仕組みであった。施行は1998年12月1日。11年半を経た現在、すでにNPO法人数は4万を超え、「市民公益」の考えも次第に普及してきたかに見える。しかしそれは、日本のフィランソロピー活動の一部に風穴をあけたに過ぎない。

新しい公益法人制度改革が意味するもの

この風穴を全面的に広げることになるのが、民法の抜本改正による公益法人制度改革であった。2008年12月1日、NPO法施行から10年後の施行によって、110年続いた公益法人制度は全く新しい制度に生まれ変わった。もはや主務官庁制度は存在しなくなり、準則主義によって設立可能な一般法人と、その公益認定による公益法人という2段階の

2010年度から新しい公益財団法人として再出発した。

トヨタ財団について言えば、もともと総理府の所管ということで、タテ割りの支配による制約は殆ど受けてこなかった。国内・国際を含め、その時代の課題を自由に探索し、その解決に向けて自由に取り組んできた。トヨタ財団の歴史に意味があるとすれば、まさにそれは、そこにあったと言ってもよい。それは「市民公益」精神の先取りでもあった。ただそれ故に、税制優遇の点では辛い思いもしてきた。私の在職中にも、事務局では何度も特増の認定を受けるべく検討をしてきた。便宜的に事業内容を再整理して重点を移せば、それは可能であったかもしれない。しかしそれは財団の最も大切とする価値、意思の根幹に歪をもたらしかねない。寄付者（トヨタ自動車）には申しわけなく思いつつも、その理解と寛容に甘えつつ、特増の認定を受けることは諦めてきた。私の退任後も、同じ努力は何度も繰り返されてきたのではないかと思う。その繰り返しを、もうしなくてすむ。今回のトヨタ財団の公益財団法人としてのスタートは、そのことだけにでも大きな意味があるように思う。

そしてこの6月の理事会では、今後の財団の役割を再認識し、「トヨタ財団ビジョン2010よりよい未来を構築するために」を採択したという。社会的課題が益々多様化し増大する中、今後の民間非営利活動を支える土台としてのトヨタ財団の役割に、さらに大きな期待を寄せたい。



モリンダの木

1999年に「スレッズ・オブ・ライフ（生命の糸）」というギャラリをウブドに開き、天然染料を用いた手織り布を販売する事業に乗り出したのです。ギャラリを開いてみると、膨大な手間暇をかけた自然のぬくもりが感じられる伝統的手織り布には高い値がつくことがわかり、布を織ることは、地域の島々の女性たちの経済的地位を向上させ、伝統的手織り布の生産に弾みがつくのではないかと考えました。

「ところが、経済的対策だけでは伝統的手織り布の衰退を食い止めることができないことが分かってきたのです」とウィリアムさんは話してくれました。開発による自然破壊は天然染料の材料となる植物の生育を妨げその入手を困難にし、また、島々に孤立している織り手は、染色や手織りの技術について何か疑問がわいても自分自身を頼る以外に方法がない状況に置かれていたからです。そこで立ち上げたのが「バリ文化愛好家財団」です。島々に散在する織り手をネットワークでつなぎ、伝統的手織り布の製作に関するさまざまな情報を交換し合い、彼らの能力を高めていくことによって、伝統的手織り布の生産を活性化しようとする組織です。ネットワークの立ち上げには世界銀行の支援を受け、2005年と2006年の2回にわたって約100名の織り手や天然染料の材料となる植物を育てる農民などの参加者を得て、「ヌサンタラ（島々）織り手フェスティバル」を開催することに成功しました。

【訪問先】
プバリ文化愛好家財団(バリ島ウブド)

【助成対象者代表】
 ●ジーン・マリー・ホウェ
 (2009年度アジア隣人プログラム)

●ウィリアム・イングラム
 (2006年度アジア隣人ネットワークプログラム)

【助成題目】
 2009年度：良き隣人としての東ティモールとインドネシア——伝統織物工芸を通じた人と文化、環境のつながり再構築

2006年度：ヌサンタラの織り手ネットワークの構築——持続可能な農村暮らしを目的とした参加型リーダーシップ、および綿と天然染料におけるコミュニティ・トレードの確立

バリ島にプバリ文化愛好家財団を訪ねて 島々をつなぐ織り手ネットワーク

活動地へおじゃまします!

●姫本由美子(トヨタ財団チーフプログラムオフィサー)



インドネシア最大の観光地バリ島の玄関口、ングラライ国際空港から車で約1時間北上すると、棚田の広がる山間の地域に「バリ島文化の中心地」と称されるウブド村が出現します。細密画のような独特のスタイルをもつバリ絵画のアトリエやギャラリが点在し、バリ舞踊随一といわれるティルタ・サリ舞踊団を抱えるプリアタン村も目と鼻の先にある、まさに芸術の村です。

今回このウブド村に活動拠点をおくプバリ文化愛好家財団におじゃましました。「プバリ」(Babari)とは儀式を意味し、カイン(布)・プバリが儀礼などに用いられる神聖な布を指すことからわかるように、プバリ文化愛好家財団は、天然染料を用いた手織りの伝統的布の生産を復活させ再興することを目的として、2002年に設立された財団です。お話をうかがったのは、この財団の代表をつとめるジーン・ホウェさんとウィリアム・イングラムさん夫妻です。ジーンさんはアメリカ人、ウィリアムさんはイギリス人ですが、二人は以前日本で出会い結婚され、インドネシアの手織り布の美しさに魅せられて、1990年代初頭にバリに移り住まれたのです。

織り手の孤立化をふせぐために

赤道直下の1万8000あまりの大小の島々からなるインドネシアは、まさにこの手織り布の宝庫です。特に、バリ島や、その東に位置するロンボク島、スンバ島そしてティモール島などからなるヌサ・トゥンガラ諸島には、手織り布の生産地が集中しています。しかし、近代化の波を受けて化学染料を用いて機械生産された布が市場を席巻するなか、昔ながらの天然染料を用いた手織り布の生産は次第に消えつつある状況にありました。しかも「それは単に伝統的手織り布がなくなることだけを意味するわけではありません。伝統的手織り布は、農作物の豊作を祈って祖先に奉納される儀礼に用いられたり、結婚式の新郎新婦を着飾り、死者の遺体を包んだり、まさにこの地域の人びとの生活に息づいてきた伝統文化になくしてはならないものです。したがって、この伝統的手織り布が消えていくことは、伝統文化そのものが消滅していくことにつながるのです」とジーンさんは強調されました。

こうした危機感に背中を押され、ジーン、ウィリアム夫妻は当財団がアジア隣人ネットワークプログラムでジーン、ウィリアム夫妻のプロジェクトの助成を行ったのはその直後で、2006年11月からの2年間で、継続助成として2009年11月からの2年間の、合わせて4年間で、このプロジェクトが主にめざしていることは、ヌサンタラ織り手ネットワークへの参加者を増やすこと、特にこれまで関係のなかった東ティモールの織り手の人たちにネットワークに参加してもらい、手織り布生産にかかわるさまざまな技術やその販売力を高め合うことです。またそのための具体的方法として、これらのネットワークの参加者の間で、綿や天然染料の材料の取引ができるようにすることも目標に掲げました。

少し冷静に、一緒に考えること

「ネットワークへの参加者を増やしていくには、まずヌサ・トゥンガラの島々を丹念に訪ね、織り手の人たちとフェイス・トゥ・フェイスで向き合い信頼関係を築いていくことが大切であり、それが築ければその後のコミュニケーションには、これが活躍してくれる」とウィリアムさんは携帯電話をかざしました。ネットワークを構築するには、伝統的な手織り布を守っていききたいという感情を共有し、その共通の感情の上に信頼関係が生まれてくる。ただし、それだけでは十分でなく、それぞれのメンバーがたとえ異なる天然染料を使う技術を持っていて、お互いを刺激し合えるような要素も必要なのです。「さらに、それらの天然染料の材料を取引し合って、ネットワークに貢献できるような何かをお互いにもっていることも大切なんだよ」と、ウィリアムさんは自分の考えるネットワーク構築に求められるポイントを披露してくれました。

もう一つ重要なことは、ネットワークの要に在る人物が上から教え込むようなことはしないこと、あくまでもメンバーが平等の立場に立てることであるといえます。あるメンバーが天然染料の材料となる植物を育てるための堆肥の作り方を教えてほしいといってきたときも、持っている知識を一方的に教えるのではなく、そのメンバーは堆肥について何を知っているのか、どのように利用したいのか、などの問いかけをし、そのメンバーの地域で堆肥を作るにはどの方法がよいのか

一緒に考えるようにすることで、よりダイナミックな行動ができるようになる、という。このポイントは、ジーン、ウィリアム夫妻が地元出身でないため、外からの押し付けを避けようとする気持ちに通じているのかもしれない。ただしご夫妻は、外の人間だからこそ果たせる役割もあると考えている。それは、地元の人たちが伝統を守っていきたいという過熱した思い入れを、どうしたらそれが可能になるのか具体的な道筋を少し冷静になって一緒に考えていくことだという。

ネットワーク拡大と伝統的手織り布の復活

さて、助成させていただいた活動を通して、2006年末からの2年間のあいだに又サントラ織り手ネットワークに参加する協同組合の会員数は16から41へと約2.5倍に増えたそうです。特に、独立後も政治経済の混乱を極めていた東ティモールにあるアロラ財団が2008年にフロレス島で開催されたワークショップに参加、ネットワークが大きく拡大し、今後の協力関係の進展が期待されます。



ジーンさん(右)とウィリアムさん

ネットワーク参加者間の交易も始まりました。当初は綿と天然染料の材料を考えていましたが、交易の中心となったのは天然染料、特に赤色の天然染料の材料となるモリンダと呼ばれる木の根でした。

こんなエピソードも教えてもらいました。ネットワークに参加したレンバタ島の織り手の女性は、他の地域で使われている赤色の方が自分が染色した赤色よりもきれいだということを発見しました。そのよりきれいな赤色の染色の方法を教えてください、地元に戻って調べて見たところ、教えてもらった方法が1960年代に地元でも使われていたことを突き止め、その方法を復活させたそうです。

このように又サントラ織り手ネットワークは、着実に拡大し、その機能を発揮、東ティモールも含めた又サントラの地域の伝統的手織り布の復活に一役買っている理由の一端をジーン、ウィリアム夫妻のお話のなかに垣間見ることができました。

Column

観光と文化継承の狭間で

バリ島ではほとんど毎日、どこかでお祭りや芸能の催しが行われています。

ことに芸術の村ウブドやその周辺は踊りや劇などが盛んで、その繊細優美、かつ奥の深い芸能はガムラン音楽とともに、バリを訪れる世界中の観光客の目と耳を惹きつけ、魅了しています。



「ティルタ・サリ」の舞台(プリアタンにて)

私もバリの宗教儀礼や芸能文化の素晴らしさに衝撃を受けた

者の一人ですが、本稿の手織り布などと同様に近代化とグローバリズムの波がもたらしたものは、「伝統文化」の継承にあたって必ずしもよきことばかりとはいえません。

しかし、バリはいうなればハイブリッドの強さと寛容性をそなえた島です。たとえば有名な舞踊劇ケチャなど、「外」からの視点を果敢に採り入れ、自らのものとして洗練させてきた歴史を見ても、そのことがわかります。

訪れるたびに、他のアジア諸国同様、その変貌ぶりに目をみはるバリ。その変化のなかに、変えることで変えてはならぬものをその内に保持していこうとするしたたかな姿勢を見ようとするのは、バリそして東南アジアの風土や文化を愛する者の欲目なのでしょうか。(I.I.)

JOINT
ホット・インタヴュー

ギアチェンジしながら 楽しく暮らす

INTERVIEW

助成対象者／井上将太

聞き手：喜田亮子(トヨタ財団プログラムオフィサー)



井上将太さんは、高知大学農学部森林学科2年のときに、全国の建築学科の学生を対象とした森と木造建築を学ぶ滞在型セミナー「森の未来に出会う旅」を実施した。日本林業の再生には、日本の木を使うことが重要、しかし設計士の卵たちが木造建築を習う場がないのが現状だ。セミナーは、その解決のために企画されたもの。

トヨタ財団の助成で井上さんは、「森の未来に出会う旅」をはじめとする木の送り手と木の使い手をつなぐ試みを通じた、地域全体の活性化に取り組んでいる。4月に、大学院に進学、同時にプロジェクトの実施地である嶺北杉で有名な高知県嶺北地域本山町に移住。今回は、本山町内にある井上さんのアルバイト先「ばうむ合同会社」でお話を聞いた。

もともと林業を勉強しようと思ったきっかけは何だったのでしょうか。

高校時代は、バスケットボールをやっていました。通っていた高校で体育会系の子は、山に間伐に行くというのがあって、じゃんけんで負けて行ったんです。この最初の間伐体験がすごく楽しかったんですよ。その前から大学では何か環境問題をやらなあかんなあとも漠然と考えていました。親が木工で小さい頃から木が身近でしたし、それで林業と環境がつながって、大学は森林学科にしようと思ったのです。

「森の未来に出会う旅」はどのようについに生まれたのですか。

大学1年の授業で南の風社が企画してい

る「いなかインターンシップ」の募集のちらしが配られました。友達に誘われて、1週間

位ならという気持ちで相談にいったら、コーディネーターの方に1週間じゃなにもわからないからと説得されて、3週間インターンシップをすることになりました。そのときのインターン先が土佐町の(株)森昭木材でした。そこで社長の田岡秀昭さんと出会いました。社長の「林業だけでなく地域全体を見る視点が大事だ」という考えに啓発されました。

インターンの最終日に、高知県森林環境税に関する嶺北地域ブロック会議が開催されました。その席で森林環境税を子どもに環境教育に使うことを提案しました。この発言をみなさんにいい案だと言っていたら、11月に開催された全県大会に嶺北代表のパネリス

トとして、参加させていくことになったのです。

それで、夏のインターンシップが終わってから大会に向けた打ち合わせなどで、地域や田岡社長との関係がきました。飲み会もちよくちよくあって、その席で田岡社長が「建築学科では、木造建築を教えない。嶺北に若者と呼んで木造建築を教えるセミナーをやろう」と。自分自身も同じような問題意識を持っていたので、飲んだ勢いも手伝ってやろうやろうということになりました。

「森の未来に出会う旅」第一回は、2009年の9月に開催されました。開催までは、順調でしたか。

勢いで「やる」と言ったものの、当時ぼくは大学2年生で、企画を立ち上げ実施することなど未経験だったので、何をやっていいかわかりませんでした。それこそ電話のかけ方、メールの書き方も知らない状態でよく怒られました。へこんだこともあるんですが、とにかく言ったからにはやる、という責任感でがんばりました。そうはいつでも資金も決まっていなかった状態でした。資金については、勝手に森林環境税を使おうと思っていたんです。それで森林環境税の運営をしていた「高知県森と緑の会」に相談にいったら、そういう予算はないと。だけどちょうどその日、理事長がいらしていて、理事長に直接話してみたらということに相談させてもらったら、共催に入って資金を出してくれるということになったんです。

じつは、6月末まで告知も何もしてなくて

す。その夜、町長の前で本山町に住みますと勢いで言ってしまった。その後、シンポジウムのパネリストとして町の人の前で「移住します」と宣言した。ちょうど同じパネリストにばうむ合同会社の藤川豊文社長がいました。社長に住むところありますかと相談したところ、一軒家があるということで、その日のうちに見学に行き住むことを決めました。同時に、「地域のみなさんが参加できる地域の合同会社をつくりたい」という社長の考えに共感して、アルバイトをさせてもらうことになりました。奇しくも、本山町に転入届を出した6月1日は、本山町の町制100周年の日だったんですよ！

この年齢で一軒家の主ですから、うれいすね。それにとかく嶺北の人が好きで、人とのつながりが楽しいです。ぼくは、安芸市の出身で、子どもの頃も近所のおっちゃんおばちゃんとか、人とのつながりが多かった。でも学生の頃は、まちなかで暮らして、まったくそういうのがない生活で、嶺北に来てからやっぱり、こういう人とのつながりがある生活はいいなって感じています。

地方では、若者が出て行ってしまおうということが問題になっています。その解決のために何が必要だと思いますか。

若い人がいなかで暮らすといった場合、二通りあると思います。一つは、役場なり会社なり雇用があるところに行く。もう一つは、起業です。ただし、新卒で起業するといつても簡単じゃありません。起業するには、若い

参加者がゼロでした。県外はあきらめて県内に絞るようにというアドバイスもありました。でも悔しかったので、ミクシィとかを使って告知して、県外中心に16名の参加者を集めることができ、無事開催することができました。

その後「森の未来に出会う旅」はどのように展開しているのですか？

2回目からは、実行委員会形式で実施しています。学生グループ、高知県、嶺北木材共同組合など産学官連携です。この産学官の学は、大学じゃなくて学生の学というところが

井上 将太 (2008年度 地域社会プログラム助成)

【題目】 いなか未来ネットワーク創出プロジェクト

【助成額】 400万円 (2008年度)

【助成概要】 今日地球温暖化が叫ばれる中で、日本の国土の67%である森林のCO₂吸収の役割が大きくなっている。しかし、日本の林業は木材自給率20%であり、いまだに外国産の木を使っている。日本においてCO₂の吸収量を増やすためには間伐をした健全な森を維持する必要があり、そのために日本の木を使い、山側にお金を落とし、林業自体を活性化させなければならない。木材を使うためには、木造建築を多く建てるのが不可欠だが、家づくりのキーマンである設計士が木造建築のことを大学で習わない現状がある。本プロジェクトは、林業が盛んな高知県において、全国の建築学科の学生を対象に、森のことから木造建築のことを学び、将来的には産地とのネットワークを形成することで、若手設計士を育成する取り組みである。また、この繋がりを基に持続可能な地域社会の形成をめざす。



嶺北地域の風景。棚田も見える

人が働きながらスキルを身につけることができるワークショップが必要です。そういう機能があれば、いなかで起業したいという人は結構いるんじゃないかなと思います。多くの場合は、ばうむ合同会社がその場になります。

インターンのときに「れいほくスケルトン」(産地直送で販売するプレカットされた構造材)のブランディングの会議に参加させてもらったことがあります。全国から設計士とかデザイナーの方が来ていました。いなかにも都会とつながりながらビジネスができるんだと、そのとき実感しました。

都会で一定の期間働いてからUターン、インターンするというのも一つの方法ですが、40代となるとそれなりの収入が見込めないとためらってしまいますよね。でも、若い人はお

おもしろいかなと思っと思っています。

森の未来に出会う旅は、産地と設計士のネットワークを形成することが目的です。ゆるやかに関係が継続し10年後、20年後、事業として具体的な動きが出てくれば良いなと思います。ネットワークを続けていくために、昨年には、トヨタ財団の助成でOB会、OG会も開催しました。助成では、森の未来に出会う旅を公式プログラムにする計画もすすめています。四国8大学の連携事業であるeKnowledgeコンソーシアム四国で実現できそうです。

その他には、一般消費者向け、社会人向けのツアーなども企画しています。いずれも独立採算をめざしています。ツアーだけだと難しいかもしれないけど、商品を買ってもらうことと合わせて、地域にお金がおちるようになればと思っっています。ツアーの参加費やプログラムの見直しもしています。

林業を中心にしながら農業などにも広げて地域全体の活性化につながるツアーなどを企画していきたいと思っっています。嶺北は、米もおいしいんですよ。

4月からは、嶺北地域本山町に移住しました。どうして移住を決めたのですか。嶺北の暮らしはどうですか。

通いながらプロジェクトを進めてきてなんか違うなあというのがずっとありました。ある日、本山町の居酒屋で飲んでいたら、知らないおっちゃんが今夜泊めてくれるということで、ついていったらその人は町長だったんです。

金がなくても暮らしていけるんです。住むところと食べるところさえあれば。だから地方にそういう場をつくって、起業したい若者を呼んでくれればよいと思います。

同世代の若者にメッセージをお願いします。

いなかの暮らしは、ギアチェンジができる生活です。ビジネスのシーンでは、スピード感が重要、トップギアで動いています。一方生活では、スローギア。ゆったりとしたリズムです。スローとファストの両方が共存している。この感覚はとても面白いです。

いなかには、ある意味、力のおよぶ範囲が限られているので、逆に新卒の若者でも地域を動かしていける可能性があります。ぼくたちは若者は、政治から縁遠いと言いますが、いなかでは町長も議員の方も会おうと思えば会うことができ、一緒に地域をよくしていくと行動できます。歴史をつくっていく感じがします。新しい形のやりがいかなと思います。

ただ、受け入れてくれる人びとがいてはじめて、自分の居場所ができるものです。ト



ヨタ財団の地域社会プログラムの助成を受けているグループとか、探せばそういう受け入れてくれる人たちは結構いるんじゃないかなあ。

*井上さんはブログを公開中。

「井上将太奮闘記 IN 嶺北」<http://mori-mirai.jugem.jp/> をご覧ください。

明日をひらく「本」の力

● 喜田亮子(トヨタ財団プログラムオフィサー)

トヨタ財団の過去の助成プログラムを紹介する本企画。創刊号から3号までは、身近な環境をみつめよう「市民研究コンクール」をとりあげた。本号からは、「隣人をよく知ろう」礎を築いたプログラム、「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成を振り返り、今後の活動へとつながるヒントを探ってみよう。



「隣人をよく知ろう」プログラム(通称「隣プロ」)は、日本と東南アジア諸国間の相互理解を、翻訳出版を通じて実現しようとして1978年に立ち上げられたプログラムである。

その前年、当時国際部門のプログラムオフィサーであった岩本一恵さんは、東南アジアを中心とした6カ国を訪問し、100名を超す知識人から話を聞いた。そこからでてきた要望は、①日本人に東南アジアをもっと知ってほしい、②日本をもっと知りたい、③日本のみならずアジアの隣国のことをもっと知りたい、という3点であった。とりわけ、①の日本人に東南アジアの人びとの生活や文化、歴史を知ってほしいという要望が強かったそうだ。

そこで、隣プロでははじめに、東南アジアの本を日強くありました。しかし、当時アジアのなかでも東南アジアに関する書籍はほとんどなく、まして、私たちが出版をはじめの前は、翻訳書は皆無に等しかった。私は、東南アジアに関する本が出版されたらどんな本でも買ったものです」と、時代状況を振り返る。

坂井さんは、助成を受けて刊行した初めての本(タイ)『サーラピーの咲く季節』(スワンニー・スコンター/吉岡峯子訳)が大型書店で人目につくようにディスプレイ(平積み)されていたことに触れ、「80年代はアジアへの関心が高く、しかしまた、アジアの本が珍しかった時代です」と、それを見て震えるほど感動したという思い出を語られた。「アジアの文学が平積みされるなど今では考えられないことだと思います」。

東南アジアの人びとの声にこたえて誕生した隣プロだが、アジアへの関心が高まっていた日本社会においても、翻訳出版の促進は時代が求めているプログラムだったようだ。当時の読者カードを拝見すると、アジアに滞在経験のあるビジネスマンや戦争体験者など、多様な層の読者からの感動とさらなる期待を込めた声が多数届けられていた。

また、その時代に少数ながらも東南アジアの本を日本に紹介したいと思う熱心な編集者や翻訳者の方が存在し、その方々とトヨタ財団が出会えたことも時代の必然だったのだろうか。

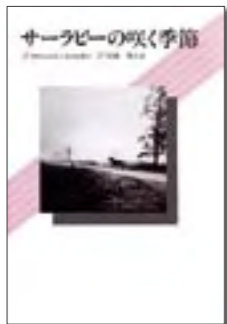
本はすべての人の努力の結晶

じつは、そもそも坂井さんが段々社を立ち上げたのは、隣プロとの出会いがきっかけだった。会社を辞め、出産して子育てに懸命になる一方、社会からとりのこされるさびしさや、このまま一生を終えることの不安があったともいう。結婚前に携わっていた大手出版社での編集経験を活かし、子育てをしながら一人ででき

本は、
企画から読者まで
関わるすべての人の共同作業
——坂井正子さん



『サーラピーの咲く季節』
(スワンニー・スコンター/吉岡 峯子 訳)



『東南アジアを知る300冊』(発行：アジア民族造形文化研究所) 1991年に発行されたこの冊子は、トヨタ財団の助成により作成された。また、本冊子に紹介されている300冊のなかには、隣プロの助成を受けた書籍が100冊近く含まれている。

本で翻訳出版するプログラム「日本向け」がスタートする。その後、1982年から日本の本を東南アジア各国で翻訳出版する「東南アジア向け」、1983年には東南アジア域内でそれぞれの国の本を他国で翻訳出版する「東南アジア相互間」の出版促進助成プログラムが誕生した。その後、南アジアやモンゴルといった国々にも広がり、2003年のプログラム終了までに日本向け210冊、東南アジア向け・東南アジア相互間(後にアジア相互間)では、450冊の本がこの世に生を受けた。1993年には、日本とアジアの相互理解に寄与した先駆的な取り組みとして、企業メセナ協議会が主催している「メセナ大賞」の「メセナ特別賞」を受賞する。

時代に求められて誕生した隣プロ

隣プロがこの世に生まれた1970年代後半から80年代というのどのような時代だったのか。ヴェトナム戦争が1975年に終結。1978年からは、日本でもインドシナ難民の定住受け入れが始まる。日本企業の東南アジア進出が本格化した時代でもあったが、諸国間相互の関係は、必ずしも好ましいものではなかった。一方、国際ボランティアセンター(JVC)やシャンティ国際ボランティア会(SVA)といった東南アジアで活動を展開するNGOも1980年の初め頃に誕生している。

桑原さんは、「当時は、日本のアジアへの関心が熱かった時代。簡単には、渡航できない時代だったから余計にアジアを知りたい、情報がほしいという思いがある仕事を模索していたとき、隣プロを紹介した新聞記事が目にとまり、トヨタ財団と連絡をとる。それがきっかけとなって「アジアの女性作家の本を女性翻訳者と女性編集者が日本に紹介する」という企画が生まれたのである。坂井さんは、「当時私はアジアのことを何も知らなかったですし、出版社としてスタートもしていないときでした。それでも岩本さんは、前向きに話をすすめてくれました」と振り返る。その出会いから隣プロ終了までの間に段々社からは隣プロの助成による14冊(それ以外は5冊)の本が刊行され、2004年には、「現代アジアの女性作家秀作シリーズ」が日本翻訳文化賞を受賞する。

本が刊行されるまで、電子メールもFAXもない時代に郵便で海外にいる翻訳者と毎週手紙をやりとりしたこと、岩本さんなど財団のプログラムオフィサーが出張の際に現地でタイプされた生原稿を受け取ってきたこと、複数の国を跨いで契約をめぐらしたトラブルなど、本が刊行されるまでの数々のエピソードを、坂井さんは昨日のことのように生き生きと語る。「困ったときは、なんでもトヨタ財団に相談しました。そんなとき、プログラムオフィサーがさりげなく手をさしおべてくれたのがありがたかった。お世辞ではなく、みなさん純粋な気持ちから、親身になって一緒に考えてくれた。助成金だけでなく、そのおかげでここまでこられたと感謝しています」。

さらに「本は、企画から読者まで、関わるすべての人の共同作業」と坂井さんは語る。出版に限らず、助成活動もまた「協働」の姿勢が不可欠である。時代の声を聞き、出会いを受け止め、時に起きるトラブルにも負けず、共同作業にじっくりと取り組む気概があつてはじめて良い助成が実現するのだということを、改めて教えられた。

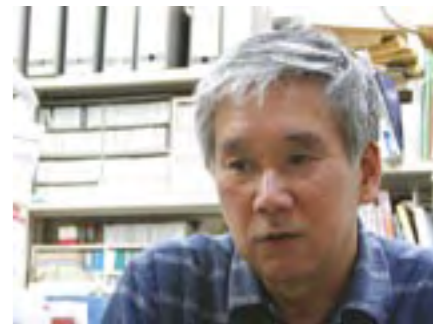
東南アジア文学の魅力、物語の力

隣プロにより出版された本は、インドネシアの『ゲリラの家族』『ガラスの家』（プラムディヤ・アナンタ・トゥール／押川典昭訳）のような重厚な歴史小説から、ポップ小説と呼ばれる『アルジュナは愛をもとめる』（ユディステイラ・ANM・マサルディ／押川典昭訳）などまで、文学作品が多いのが一つの特徴だ。桑原さんは、「向こうの人びとがどういう暮らしをして、どのような葛藤があり、どんな思いを抱いているのか、それが社会や歴史的背景のなかで心の動きとして理解できるのはやはり文学」と語る。坂井さんも同様に、「新聞記事の向こう側にある人びとの苦悩や喜びを生活者の目とおして教えてくれる」と物語の力を表現する。

とりわけ東南アジアの文学は、植民地、戦争、宗教、民族といった、現代において重要かつ困難な問題について市井の人びとの視点で描かれているものが多い。それぞれの問題が相互に作用し複雑に絡み合いながら、人びとの日々の暮らしや人生に影響を及ぼしていることが、時に物語や登場人物に自分の思いを投影させながら、「隣人」として、また自らのこととして生々しく実感することができる。

そして、これから……

多様な魅力にあふれる東南アジアの文学だが、2003年度に隣プロが終了して以降、その刊行点数が大幅に減っているようだ。本そのものが売れにくい時代でもある。とても残念で困難な状況だが、桑原さんも坂井さんも、たとえ少数でも読者がいる限り、じっくりと良い本を世に出していきたいと語る。桑原さんは、「私は紙の本の出版にこだわりたい。それに今は



評価は、
長い時間をかけて
時代がくだすものです
——桑原 晨さん

『ガラスの家』
(プラムディヤ・アナンタ・トゥール
／押川典昭訳)



THE TOYOTA FOUNDATION トヨタ財団ジャーナル September 2010

INFORMATION

●プログラムの公募開始

——地域社会プログラム

●プログラムの応募状況

——アジア隣人プログラム

——特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」
——研究助成プログラム

プログラムの公募開始

2010年度地域社会プログラムの公募を、9月8日より開始いたします。基本テーマ「地域に根ざした仕組みづくり——自立と共生の新たな地域社会をめざして」のもと、地域に生きる人びとが主体となり、その課題の解決をめざす、実践的な活動を支援します。公募に際しては、岐阜(9月18日)、佐賀(10月16日)、東京(10月23日)他全国各地で、公募説明会ならびに個別相談会を実施します。詳しくは、当財団ウェブ・サイトをご覧ください。

プログラムの応募状況

2010年度アジア隣人プログラム、特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」、研究助成プログラムの公募を5

まだ、本に助成した隣プロを評価する時期でもないでしょう」という。「本は、たとえマイナーなものであっても、よい本を読みたい人が、読みたいと思ったとき、手に取って読めるものがそこにあるということに、私たちが本を編集・出版する大事な意味があると思っています。評価は、もつと長い時間をかけて時代がくだすものです」という。

これからも、少数数でもくじけずに、これはと思った良書を出し続けること。そして、一人でも二人でも多くのよき読者の手に届くこと。それは、お二人が共通に語られていた願いである。本の出版のみではなく、いつとぎの「流行」に媚びずに、真に価値ある活動に助成し支援することが務めであるとの思いを鼓舞する勇氣ある言葉だった。

現代、知りたいことは簡単に知ることができ、連絡をとるのも、どこへ行くのも容易になった。とかく、成果や「答え」を早く求める時代。しかし、すべてとはいわずも、時にはじつくりと向き合い、答えを少し先に延ばして「待つ」姿勢も必要ではないかと感じた。助成から数年といった月日を経て刊行され、さらにそれを必要とする人と出会うのに長い年月がかかる。今のせつかな世の中では気の遠くなるような話だ。しかし、時間をかけて未来の人に何かをのこし、評価をその手に委ねるといいうのも、助成の意義であり楽しみの一つではないか。隣プロはひとまず終了した。だが、そこで生まれた本は生き続け、心の糧となつて人びとをつないでいる。この先も、未知の誰かとの出会い、また新しい感動を生み出す日がくると私たちは信じている。

——そんな思いを失わずに、本プログラムの「ころ」を明日へと引き継いでいきたい。

月12日(ウェブ応募は5月7日)に締め切りしました。

応募件数は「アジア隣人プログラム」354件(昨年度313件)、特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」68件(同74件)、「研究助成プログラム」939件(同734件)の合計1361件となりました。

今年度は、新たにウェブ・サイトからの応募受付を開始したこともあり、昨年度に比べ応募総数は約20%増加しました。特に海外からの応募増は顕著で、昨年より49%の増加となっております。助成プロジェクトは選考委員会の選考を経て、今秋の理事会にて決定されます。

今回のウェブ応募の状況をふまえ、9月8日より開始する2010年度地域社会プログラムの公募でも、ウェブ応募の受付を実施します。応募手続きにつきましては、ウェブ・サイトの助成応募案内のページにて、ご確認ください。



トヨタ財団のウェブ・サイト
<http://www.toyotafound.or.jp/>

TOPICS

●助成金贈呈式開催

——地域社会プログラム

●高知シンポジウム開催

——地域社会プログラム

助成金贈呈式開催

4月17日、トヨタオートサロンアムラックス東京にて、2009年度地域社会プログラム助成金贈呈式が開催されました。

2009年度の地域社会プログラムは「地域に根ざした仕組みづくり——自立と共生の新たな地域社会をめざして」をテーマとして公募を実施し、619件の応募の中から国内36件のプロジェクトが採択されました(28、29ページ参照)。当日は助成対象者を中心に約120名もの参加がありました。

第一部では、「自立と共生の新たな地域社会に向けての『仕組み』とは？」と題して、ミニ・シンポジウムが行われました。

まず、2009年度の助成対象となった「大地人の里に広がる『町民駅を中心にしたまちづくり人づくり』プロジェクト」を代表して、渡部さやかさんの発表がありました。

本プロジェクトの経緯として2006年度

いプロジェクトにしたい」と力強い挨拶を述べられました。

第三部の懇親会は、助成対象者間の交流を目的とした立食パーティーでした。参加者によるお互いの活動紹介や、地域社会の活性化に向けた具体的な方策など、活発な意見交換がなされていました。

高知シンポジウム開催

5月16日、高知県香南市赤岡町にある芝居小屋「弁天座」にて、シンポジウム「人がつながり地域が動く」女性を支える高知のチカラ」が開催されました。

今回のシンポジウムを開催するにあたり、トヨタ財団は、NPO高知市民会議や地元大学生らと共に、シンポジウム実行委員会を組織し、準備を行ってきました。「高知県は他地域と比べて女性が元気」という地域の特性をヒントに、高知や四国で活躍する元気な女



明るい雰囲気にもまれていた会場

に当財団のユース助成を受けたプロジェクトが、高校のグループ学習のテーマとして後輩に引き継がれ、さらに地域の住民を巻き込んで大きく展開した。そして、これまでの取り組みをより強化し発展させていくための今後の活動について、語っていただきました。続いて「摘み菜アカデミー創設プロジェクト——ワシらの島は宝島」を代表して村上律子さんに発表していただきました。瀬戸内海の離島である弓削島を起点に、食べられる山野草や海藻を集めて料理する「摘み菜」を、住民自身が観光資源として再発見すること。その取り組みを進展させ、人材の養成や地域を再発見するような仕組み、郷土料理でのおもてなしを通じた観光産業の育成などについてお話をいただきました。

また、前年度の助成対象者の代表として、「栗原の食の再現と次世代への継承プロジェクト」の菊池聡さんと千葉静子さんによる、実施報告がありました。栗原市の旧家千葉家に伝わる150年前の「大秘方萬料理方全」をもとに、地域の食文化の再発見を通じて地域活性化を推進してきたこと。特に古文書の解読作業や試食会の様子など、これまでの取り組みについて、お二人から発表していただきました。

それぞれの発表後のパネルディスカッションでは、選考委員から各プロジェクトについてコメントが述べられ、今後の課題について発表者と意見交換が行われました。また、市民活動・地域活動などの非営利活動に携わっている人びとへの応援の言葉などもいただきました。

その視点から、「高知のチカラ」とは何であるかを見つけることが狙いとされました。

シンポジウムは、「旗あげ形式」によるウォーミングアップ、高知県内の各地で活躍されている女性6名による「トークショー①」、高知県外の四国3県からお越しいただいた女性3名による「トークショー②」という構成で行われました。

2つのトークショーでは、高知における女性の活躍の背景には、「地域のチカラ」に加え、「女性らしさ」というものが後押ししているのではないかとコメントが、共通してあげられていました。そして「人びととの出会い」が、ふれあいを重ねていくことに、強固なつながりがへと変化し、活動を支えるチカラとなる。「女性のチカラをもっと活かしていかなければ」というメッセージも参加者へ届けられました。

シンポジウム後の交流会では、地元の方の協力により、地域の食材を利用した手作り料理が会場を彩りました。干物や魚などは、自分たちで焼いて食べられるよう工夫がなされ、参加者は網で食材を焼きながら、地域の方やほかの参加者と交流を深めていました。今回のシンポジウムは、ひとつの県だけでなく、複数の近隣県からの視点も交えた構成で行われたため、他地域の方にとっても、色々なヒントを得られる、またとない機会となっていたようです。また、これから活動をはじめたいと考えている人と人をつなぐ場としての機能も、果たすことができたのではないかと思います。



熱のこもる報告と討論が行われたミニ・シンポジウム

ました。

第二部の助成金贈呈式では、遠山敦子理事長より「皆様方の熱意と活動の成果が日本全国をさらに元気づける力になると信じています」と助成対象者の方々に、激励のメッセージが贈られました。中村安秀選考委員長(大阪大学大学院教授)からは、選考経過の説明と、「世代や男女、地域など従来の枠組みを超えてください、そして豊かなプロジェクトにしてください」というコメントがありました。

助成対象者を代表して木田成乃さん(TEAM We Love 大島)に、遠山理事長から贈呈書が手渡されました。木田さんは「プロジェクトがうまくできるか不安でしたが、助成金を受けたことによって、自信が付き、この贈呈式で学んだことを大島に持ち帰って

BOOK REVIEW

出版物のご案内

助成プロジェクトに関連した書籍を紹介します



出会うの記憶

ゆふいん文化・記録映画祭の十年 1998-2007

「出会うの記憶」編集委員会編
●発行：海鳥社
●発行日：2010年5月26日
●価格：2,500円 + 消費税

本

書は2007年度に地域社会プログラム「出版」(代表：中谷健太郎)助成を受けて刊行された、「ゆふいん文化・記録映画祭」の10年をまとめた作品です。映画祭で上映された作品は、水俣病患者を撮影した『不知火海』など社会課題をとりあげたものから、きこの生態を映し出した『きのこの世界』という科学映画まで多岐にわたります。

映画祭パンフレットの巻頭に寄せた中谷さんのメッセージ、映画祭に関した人びとの座談会、上映された作品と監督の紹介など、映画祭に関わる記録がつぶさにまとめられています。日本の記録映画の一端を知るうえでおすすめの一冊となっています。

	代表者氏名	プロジェクトチーム名	都道府県
19	高橋 叡子	多文化共生団地創出プロジェクト千里地区推進協議会	大阪
20	渡部 万里子	鳥取アートスタートプロジェクト本部	鳥取
21	森本 里美	山陰 KAMI あかりプロジェクトチーム	鳥取
22	吉野 立	まちなか&農家共生コミュニティチーム	鳥取
23	乳井 昭陽	牛窓しおまち活性化チーム「チョーイサ」	岡山
24	井上 きよみ	介護ん！	岡山
25	長島 正一	頓原地域デザイン研究会	島根
26	玄番 隆行	じいばあさんプロジェクト	徳島
27	兼頭 一司	摘み菜アカデミー創設プロジェクトチーム	愛媛
28	新山 賢	松山 HIV/AIDS 予防啓発コミュニティ協議会	愛媛
29	工藤 良	田川ふれ愛農園隊	福岡
30	藤本 蔦枝	チーム スタッショ	福岡
31	高砂 樹史	おちかコミュニティ型旅行会社 自立支援サポーターズ	長崎
32	船津 誠司	鹿本商工チャレンジショップ「かざぐるま」	熊本
33	遠山 好勝	中山間松尾集落	熊本
34	翁長 良	アメラジアンビデオ制作・映像ワークショップチーム	沖縄
35	松田 良孝	八重山——台湾関係教材開発チーム	沖縄
36	入嵩西 正治	石垣・循環型農業研究会	沖縄

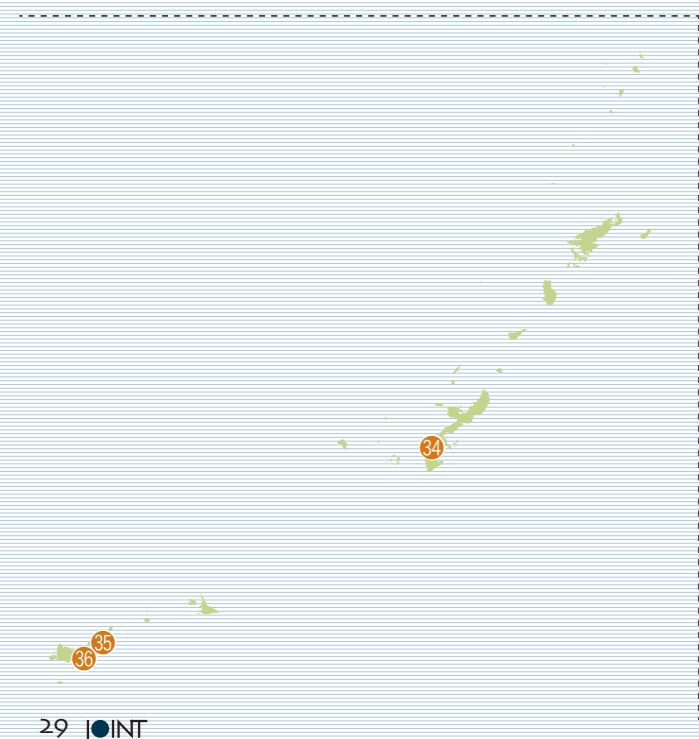
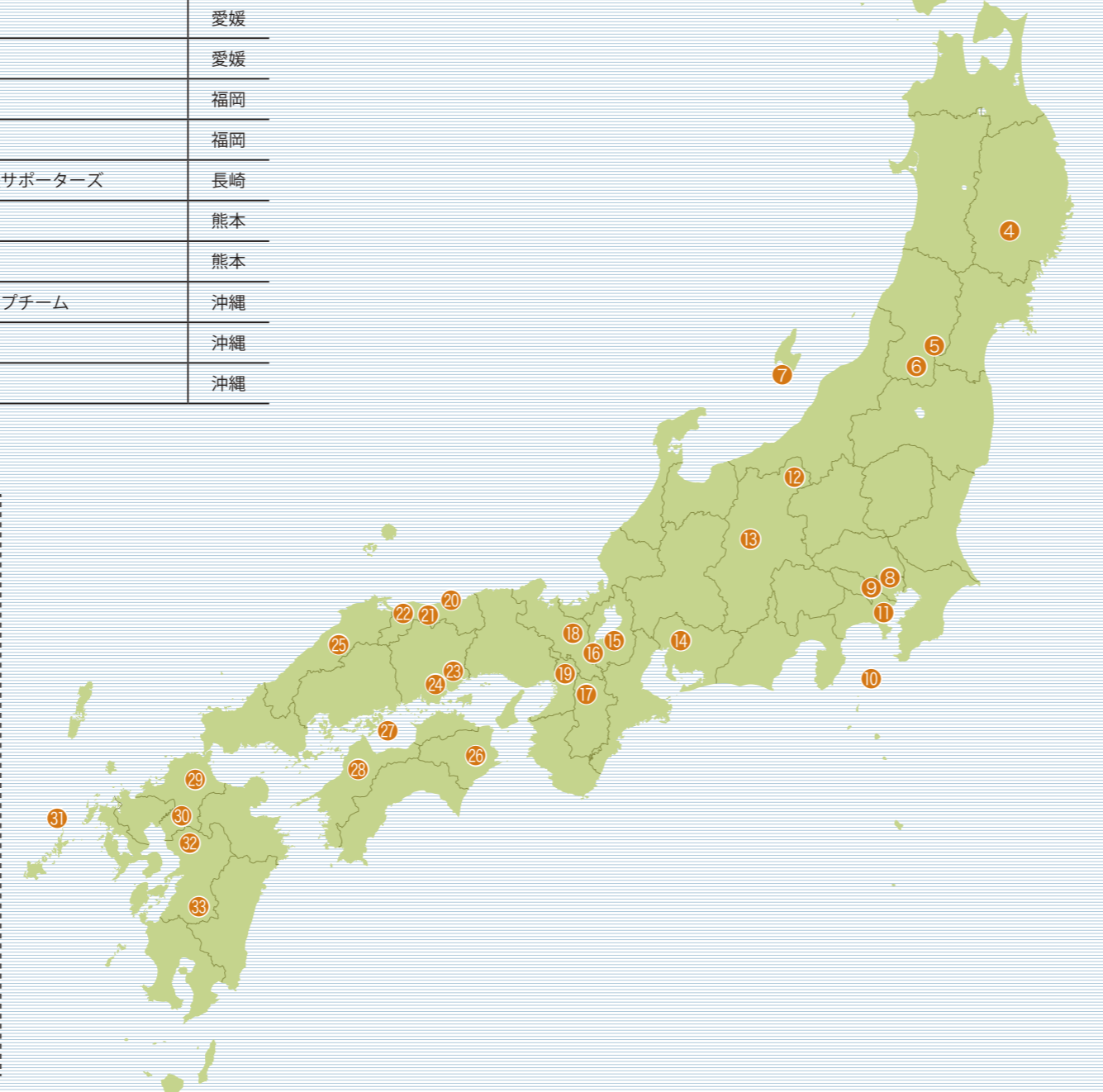


2009 地域社会プログラムマップ

トヨタ財団地域社会プログラムの2009年度助成対象プロジェクト一覧

*各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブ・サイトをご覧ください。

	代表者氏名	プロジェクトチーム名	都道府県
1	矢久保 輝子	知床どんぐり村プロジェクト	北海道
2	森 義和	医農連携促進チーム	北海道
3	永瀬 次郎	ハッピーステージ・プロジェクトチーム	北海道
4	河内山 耕	里山資源活用会	岩手
5	齋藤 真朗	古屋敷村の保存を考える会	山形
6	渡部 順一	えき・まちネットこまつ	山形
7	十文字 修	たちあがれ小木三崎！離島の半島が生きのびる実行委員会	新潟
8	広石 拓司	コモン・ランド	東京
9	村山 貞幸	日本の伝統文化伝承活動 日本大好きプロジェクト	東京
10	木田 成乃	TEAM We Love 大島	東京
11	山野 真悟	ハツネ Fine！	神奈川
12	松尾 真	チーム古道復活！	長野
13	堀内 征治	“里ミミ” 人材育成チーム	長野
14	原 愛樹	錦二丁目まちの会所 hanare	愛知
15	藤井 絢子	つくるぞ！郷土食いっぱい高校生レストラン！プロジェクトチーム	滋賀
16	廣岡 太兵衛	平尾 里山・棚田守り人の会	滋賀
17	菊野 春雄	グリムプロジェクト運営委員会	奈良
18	水野 篤夫	ミニ京都実行委員会	京都





高知県立牧野植物園にて Photo by Natsumi Washizawa

写真：鷺澤なつみ(トヨタ財団アシスタントプログラムオフィサー)

高知県立牧野植物園は1862年に高知県に生まれた牧野富太郎を顕彰する施設です。牧野富太郎はあの名高い『牧野日本植物図鑑』の著者で、日本の植物分類学の父と呼ばれる天性の偉大な植物学者です。

この夏、高知に行ったおりに、この植物園に立ち寄ってみました。この写真は広い敷地内に建っている「温室」のあるコーナーで撮ったもの。暗い室内の太陽の形にくり貫かれた天井から、くっきりとした青空がのぞいていました。

私は牧野博士に関してそれほどくわしい知識をもってはおりませんが、博士が植物学を志すようになった頃の「勉強心得」が遺されており、その一節にとても心に響くものを感じました。ここに引用させていただきます。

何事においてもそうであるが、植物の詳細は、ちょっと見で分かるようなものではない。行き詰まっても、耐え忍んで研究を続けなさい。

——「楮鞭一撻」(しゃべんいったつ) 牧野植物園のウェブ・サイトより

「何事においてもそうであるが」とありますが、ほんとうにその通りだと思います。どんなことでも根気よく「続ける」ことで、ちょっと見ではわからないことが見えてくるものなのですね。

*高知に関連した本誌の記事は19ページと27ページをご覧ください。



助成金贈呈式で「懇親会」の出番を待つ花束

【編集後記】
LAST WORD

●2010年、東京、熱帯のような日差しをあびながら、真夏の雲の流れを見上げ、突然の豪雨を心配しながら、テラスで味わうアイスコーヒー。我々を取り巻く環境は、この夏の日のように、のどかな部分を残しながら、予想もつかない変化の兆しが、急激に現れつつあるのではないかと感じています。

このような時代に生きる私たちは、過去に学び、今を真摯に見つめ、夢のある未来を信じて、変化に対して的確に対応できる改革を行う能力と、いつの時代にあっても失ってはいけないものを継承する信念を、あわせもつことが必要なのではないでしょうか。

本号の特集にご参画いただいた方々のお考えをお聞きして感銘をうけ、思いを新たにしながら、一人の人間としての責任を強く感じている次第です。[AN]

●おおよそ一年半の議論と検討を経て、この度、「トヨタ財団ビジョン2010」が策定されました。これは、今後の助成事業の指針となる財団の中長期目標と言えます。よりよい未来の構築に向けて、「柔らかなぎずな」の形成を通じた

「安心・安全な社会」の実現を使命に、4つの取り組み、すなわち、①人びとの支え合いと協働に向けた取り組み、②新たな社会形成に向けた取り組み、③グローバル化に起因する共通課題への取り組み、④文化の継承と創造へ向けた取り組みを通じて、⑤公共の福祉(パブリック・ウェルフェア)と⑥社会の発展(サステナビリティー)に貢献していくことを目標とするものです。

よりよい未来を拓いていくためには、現状を常に批判的に考察し、何がほんとうに大切なことを活発に議論していくダイナミックな社会の実現が求められるでしょう。今後は、ビジョンを踏まえた、よりインパクトのある助成プログラムの開発に向けて取り組んでいきたいと思っています。[GW]

●今号から「JOINT」編集を担当することになりました。よろしくお願致します。今号は、トヨタ財団の公益財団法人移行を記念して、社会と財団の未来を模索しました。

トヨタ財団と私は、ほぼ同じ年(私のほうが1

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブ・サイトの「お問い合わせ」フォーム、あるいはファックスでご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.4

発行日 2010年9月14日
発行人 加藤広樹
編集人 野々宮彰彦

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <http://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 トヨタループス

歳若い!)ですが、この36年というのは、その前の成長の時代から新しい時代へ移行し、さまざまな価値観が変わりつつある「迷い」の時代です。私自身親として子どもの将来をどう考えるか、子どもをどう導いていくべきなのか、頭を悩ますことも度々。座談会では、希望を失っている若者への激励ともとれるコメントも多々ありました。閉塞的な状況の中でとかく「内向き」思考になりがちだが、「課題先進国」の若者として世界の中で自分を位置づけよ!という指摘には、大きくうなずきました。

一方で、新しい時代の希望の芽はすでに芽生えているようです。今回、ホットインタビューでお会いした井上将太さん。新しい時代の新しい生き方を模索しています。彼を見ていると下流から上流へというタテ方向の価値観ではなく、問題意識を共有する仲間とのつながりに重きを置くヨコ方向の価値観を大切にしているようです。これからの時代、上をめざすのではなく、ヨコへヨコへと共感の輪を広げていくことで幸せを見つけることができるかもしれません。[RN]



THE TOYOTA FOUNDATION

<http://www.toyotafound.or.jp/>

JOINT No.4